

講義名称	曜時
Japanese Studies－ヒト脳研究としての言語研究[2] <秋> (P.9)	金 3

【教員名称】有川 康二

英語による

【講義概要】

Mother Nature created the human brain. The human brain produces a natural language as your mother language. Grammar rules are natural laws. Studying the laws and mechanisms of the human natural language computation is studying natural laws. This class studies the information processing system (the human natural language computation system) that is created by Mother Nature. The class will mainly be held in English. The examples that we use in this class are your mother languages. (母なる自然はヒト脳を創りました。ヒト脳はあなたの母語のような自然言語を生み出します。文法規則は自然法則です。ヒトの自然言語計算について調べることは、自然法則を調べることです。このクラスでは、母なる自然が創った情報処理システム(ヒト自然言語計算システム)について勉強します。授業は基本的に英語で行われます。このクラスで使用する例はみなさんの母語です。)

【学習目標】

The goal is to understand why human language study is a search for natural laws. We also challenge various commonsense dogmas about language. (なぜヒト語の研究が自然法則の探求となるのかを理解することが目標です。言葉に関する様々な常識的なドグマを疑っていきます。)

【講義計画】

- 第1回：Introduction (はじめに)
Grammar study as empirical science
(経験科学としての文法研究)
- 第2回：Questioning commonsense view on language
(ことばについての常識を疑う) (1)
- 第3回：Questioning commonsense view on human language (2)
- 第4回：Questioning commonsense view on human language (3)
- 第5回：Questioning commonsense view on human language (4)
- 第6回：Review and Q & A
- 第7回：Human language grammar as natural law
(自然法則としての文法) (1)
- 第8回：Human language grammar as natural law
(自然法則としての文法) (2)
- 第9回：Human language grammar as natural law
(自然法則としての文法) (3)
- 第10回：Human language grammar as natural law
(自然法則としての文法) (4)
- 第11回：Human language grammar as natural law
(自然法則としての文法) (5)
- 第12回：Review and Q & A
- 第13回：Student presentation (1)
- 第14回：Student presentation (2)
- 第15回：Student presentation (3)

【準備学習の指示】

Please review the materials that we cover in each class. This will help you understand the content of the next class more effectively. (毎回、授業の復習をしてください。次回の授業内容をより効果的に理解できるようになります。)

【テキスト】

【参考文献】

【コメント】

You select a topic and perform a Power Point presentation. Active class participation is evaluated. (学生はトピックを選び、パワーポイントでプレゼンを行ないます。積極的な授業参加が評価されます。)

講義名称	曜時
Japanese Studies－日本の社会と言語[2] <秋> (P.10)	火 4

【教員名称】友沢 昭江

英語による

【講義概要】

The lecture deals with the characteristics of Japanese language focusing on sociolinguistic aspects (standard Japanese and dialects, gender difference, multilingualism etc). Students are expected to attend other lecture focusing on linguistic aspects at the same time. The lecture is given in English but it is required that students have some knowledge of Japanese language. Japanese students are expected to expand their perspectives on Japanese through the discussion with foreign students. (この授業は標準語と方言、女ことば、多言語状況などの日本語の社会言語学的側面を中心に扱います。日本語の言語学的特徴を中心に扱う他の授業と合わせて受講することを薦めます。英語による授業ですが、扱う材料が日本語なので理解しやすいですし、留学生とのディスカッションを通じて日本語に対する意識を広げると同時に英語力の向上が期待できます。)

【学習目標】

The lecture aims to provide with the basic and broad knowledge on Japanese language and to foster a comparative perspective with other major languages such as English, Chinese and Korean etc.

【講義計画】

- 第1回：Guidance to the course description
- 第2回：Lexicon and style
- 第3回：Writing system and literacy(1)
- 第4回：Writing system and literacy(2)
- 第5回：Standard Japanese and dialects(1)
- 第6回：Standard Japanese and dialects(2)
- 第7回：Gender in Japanese language (1)
- 第8回：Gender in Japanese language (2)
- 第9回：Honorifics and Human relations (1)
- 第10回：Honorifics and Human relations (2)
- 第11回：Japanese as a foreign/second language-Japanese in the world
- 第12回：Multilingual Japan
- 第13回：Presentation(1)
- 第14回：Presentation(2)
- 第15回：Presentation(3)

【準備学習の指示】

Students are expected to have a sufficient language competence both of English and Japanese to understand the lecture. Japanese students who want to raise their English ability are strongly recommended to participate in this class and to engage in discussion with foreign students and to play a role as an informant of a Japanese native speaker. 日本語を題材とするので、英語に自信がない学生も少し努力をすれば参加できます。英語の実力を向上させたい人は積極的に履修することを薦めます。日本人学生は日本語の情報提供者としての役割も期待されています。

【テキスト】

Handout will be provided in each lecture.

【参考文献】

- ・ Shibatani Masayoshi(1990) The Languages of Japan(Cambridge University Press)
- ・ Noguchi M. G. and Fotos, S.(eds)(2001)Studies in Japanese Bilingualism(Multilingual Matters)
- ・ Gottlieb, Nanette(2006) Linguistic Stereotyping and Minority Groups in Japan, Routledge.
- ・ Gottlieb,N.(2011)Language in Public Spaces in Japan Routledge

【コメント】

Attendance and classroom participation are most highly evaluated (40%). Students are required to choose a topic of his/her interest on Japanese language and to give a presentation either individually or in a pair for about 15 minutes (40%). Short essay on the topics dealt with in the lecture will be assigned(20%).

(出席と授業中の発言などの参加姿勢を評価します。関心のあるテーマを選び、一人ないし二名で学期末に15分程度の発表を行います。授業のテーマに沿った課題も数回提出します。)

講義名称	曜時
アジア文化研究ーアジアの海域世界を歩く <通期> (P.14)	月 2

【教員名称】鈴木 隆史

【講義概要】

海には道がある。マラッカ海峡のように原油や天然ガスを積んだ大型タンカーや貨物を積んだ数多くの船が行き交う大動脈もあれば、東南アジアの多島海の島々をつなぐ路地裏をつなぐ毛細血管のような道もある。インドネシアやフィリピンは島嶼東南アジアと呼ばれ、約4万もの大小の島々が広がり、ヒトやモノが行き交う。サンゴ礁に囲まれた島もあれば、マングローブに覆われた島もある。熱帯アジアの多様な生態系は人々の多様な暮らしを生み出した。なかでも「漁業（漁業・採集）」や「交易」は彼らの暮らしを支える重要な生業だ。本講義ではこうした海に生きる人々の暮らしの多様で豊かさや近年の変化について多くの映像や文献などを用いて紹介する。キーワード：移動、定着、エスノネットワーク、マングローブ、船、塩、サンゴ礁、国境、越境、ウォーレス、特殊海産物（ナマコ・フカヒレ・ツバメの巣など）、サン、エビ養殖、出稼ぎなど

【学習目標】

アジアの海域世界に生きる人々と私たちの暮らしは密接に結びついていることを授業を通じて知る。定住ではなく、船で自由に移動し、各地に「移住・分散」する人々、また国境を越えて移動する人々の暮らしを通して「国境」や「国家」とは何かについても考える。

【講義計画】

- 第1回：オリエンテーション。この授業で学ぶ内容について、参考文献とともに紹介する。「国境」ってなんだろう？「国民」ってなんなんだろう？地図を開いて眺めてみよう。
- 第2回：人類の移動とアジアの海域世界、島々の遺跡に残された人類の移動と定着の痕跡、キーワード：ドーソン文化、ラピュタ人
- 第3回：アジアの海域世界の歴史を辿る：王国、交易、宗教：宗教の伝播、王国の誕生、交易の支配
キーワード：仏教、イスラム教、マラッカ王国、テルナテ王国、ティドレ王国、シュリウィジャヤ王国、ポロブドゥール遺跡
- 第4回：大航海時代の到来1）香料を求めて、香料支配の攻防
キーワード：丁香、ナツメグ、香料諸島、ポルトガル、マラッカ、オランダ
- 第5回：大航海時代の到来2）映像で見る大航海時代 キーワード：ピニシ、交易
- 第6回：支配される大地1）アジアの植民地化と海域世界 キーワード：プランテーション、強制栽培、タバコ、さとうきび、コーヒー、VOC（オランダ東インド会社）
- 第7回：支配される大地2）補足
- 第8回：塩の支配と漁業：塩田の誕生と専売制度、塩の密輸入と塩干魚生産
キーワード：バガンシアピアビ、マラッカ海峡、ムラユ人、華人ネットワーク
- 第9回：海に生きる人々1）漂海民
キーワード：水上家屋、バジャウ族、モーケン族、家船、越境
- 第10回：海に生きる人々2）プギス人
キーワード：ピニシ（木造船）、造船、交易、移動・分散・定着、漁民、農民、移住、エスノネットワーク、アポリジニ、ナマコ
- 第11回：海に生きる人々3）プギス人（映像で見るプギス人の交易）
キーワード：ピニシ（木造船）、造船、交易、移動・分散・定着、漁民、農民、移住、エスノネットワーク
- 第12回：海に生きる人々4）沖縄ウミンチュ
キーワード：追い込み網、潜水漁、海外出漁、糸満漁民
- 第13回：海に生きる人々5）沖縄ウミンチュ（映像で見る追い込み網と潜水漁）
キーワード：サンゴ礁、高瀬貝、ボタン
- 第14回：海に生きる人々6）紀州のダイバーと海外出稼ぎ
キーワード：串本、白蝶貝、木曜島、アル島（ドボ）、オーストラリア、潜水漁
- 第15回：海に生きる人々7）アジアの海域世界と海人たち
キーワード：プギス人、マンダール人、バジャウ、ウミンチュ、白蝶貝、高瀬貝
- 第16回：海に生きる人々8）インドネシア西ババア、ピアク島の黒い中国人
キーワード：水上家屋、サンゴ礁、鍛冶屋、マングローブ、交易、塩干魚、
- 第17回：海に生きる人々9）インドネシアマルク州、ハルク島
キーワード：伝統的資源管理「サシ」、サゴヤシ、丁香、ジュゴン、ロンバ（イワシ）、ケワン
- 第18回：海に生きる人々10）ハルク島（映像で見る島の暮らしとイワシの解禁）
キーワード：プカサシ
- 第19回：海に生きる人々11）インドネシア東ジャワ州バニュワングのイワシ漁
キーワード：まき網、缶詰、魚粉、ピンダン（イワシ・スマの塩煮し）
- 第20回：海に生きる人々12）インドネシア西ジャワ州インドラマウのサメ漁民
キーワード：はえ縄、フカヒレ、サメの塩漬け
- 第21回：海に生きる人々13）東ティモールアタウロ島の漁民
キーワード：素潜り漁、ウニと温泉、水中銃、魚行商人
- 第22回：海に生きる人々14）鯨を狩る、インドネシアレンバタ島
キーワード：マッコウクジラ、伝統漁法（モリ）、織物（イカット）、山の民&海の民
- 第23回：海に生きる人々15）エビ養殖1）台湾、タイ、インドネシア、ベトナム
キーワード：ブラックタイガー、マングローブ、粗放養殖、集約型養殖、モノドンバキュロウイリス
- 第24回：海に生きる人々16）エビ養殖2）
キーワード：シルボカルチャー、持続可能なエビ養殖、バナメイ
- 第25回：海に生きる人々17）変貌する漁村
キーワード：動力化、冷凍技術、流網、冷凍魚、水産物加工
- 第26回：アジアの海域世界に生きる人々と私たち1）アウトドアブームがもたらしたもの
キーワード：マングローブ、ブトン人、古着、フリーポート
- 第27回：アジアの海域世界に生きる人々と私たち2）エビ
キーワード：フェアトレード、有機エビ
- 第28回：アジアの海域世界に生きる人々と私たち3）フカヒレブームの行方
キーワード：フカヒレ、換物交易、ワシントン条約、フカヒレ取引禁止
- 第29回：アジアの海域世界に生きる人々と私たち4）まとめ
- 第30回：まとめ、
- 【準備学習の指示】
単に記憶をするのではなく、アジアの海域世界から私たちの暮らしを捉え直すことを常に念頭に置く
事前に渡されたあるいは授業で渡された資料や指定された図書を読むこと。
- 【テキスト】
【参考文献】
門田修著『海が見えるアジア』、めこん、1996年、ISBN4-8396-010-1
鶴見良行著『ナマコの眼』、筑摩書房、1990年、ISBN4-480-85522-X
鶴見良行著『海道の社会史』、1987年、朝日新聞社、ISBN4-02-259430-6
アンソニー・リード著、平野秀秋/田中優子訳『大航海時代の東南アジアⅡ』2002年、法政大学出版局、ISBN4-588-00571-5
鶴見良行、村井吉敬編著『道のアジア史』同文館、1991年、ISBN4-495-85581-6
村井吉敬著『エビと日本人』岩波新書、1988年、『エビと日本人Ⅱ』岩波新書、2007年
村井吉敬著『サシとアジアと海世界』コモンズ、1998年、赤嶺淳著『ナマコを歩く』神泉社、2010年、羽原又吉著『漂海民』岩波新書、1963年、秋道智彌編著『海人の世界』同文館、1998年他。
村井吉敬、内海愛子、飯笹佐代子編著『海峡を越える人々』コモンズ、2016年
- 【コメント】
基本的には出席するのは当然なため、成績評価の比重は少ない。
授業をしっかり聞き、メモを取り、推薦した本を読んでまとめてレポートを書いて提出する

講義名称	曜時
経営学史A <春> (P.38)	火 4

【教員名称】野田 俊範

【講義概要】

経営学は、ドイツとアメリカにおいて20世紀初頭に成立した若い学問であり、これら両国および日本において、今日までめざましい発展を遂げてきた。日本における経営学は、ドイツ経営学を骨とし、アメリカ経営学を肉として発展してきたと言われるが、特に学問としての経営学の体系や方法論などの点で、ドイツ経営学によって多大の影響を受けてきたのである。

本講義では、そのドイツ経営経済学の生成・展開の歴史を概観し、主要な理論傾向について概説するとともに、今後の発展の方向について考えることとしたい。経営経済学の歴史を学ぶことを通じて、今日世界の経営学で主流をなしているアメリカ流の経営管理とは違う、経営学の今ひとつの可能性を知ってほしい。

【学習目標】

1. ドイツ経営経済学の生成・展開の歴史を学ぶ。
2. ドイツ経営経済学の今後の発展の方向について考える。
3. 学説と、その学説の歴史的・社会的背景との関連に注目する。

【講義計画】

- 第1回：はじめに
ー経営学史研究の意義と課題
- 第2回：私経済学の成立(1)
ードイツ帝国の成立と経済の発展
- 第3回：私経済学の成立(2)
ー商科大学設立運動
- 第4回：私経済学の成立(3)
ー私経済学の樹立と私経済学論争
- 第5回：私経済学の成立(4)
ー私経済学の成立
- 第6回：経営経済学の確立(1)
ーヴァイマル共和国の成立と経営経済学
- 第7回：経営経済学の確立(2)
ー経営民主主義と経営経済学
- 第8回：経営経済学の確立(3)
ー産業合理化と経営経済学
- 第9回：経営経済学の展開(1)
ー西ドイツ経済体制の展開
- 第10回：経営経済学の展開(2)
ー社会的市場経済と経営経済学
- 第11回：転換期の経営経済学(1)
ー社会的市場経済の動揺
- 第12回：転換期の経営経済学(2)
ー経営経済学の多様化
- 第13回：現代の経営経済学(1)
ー現代ドイツにおける経済的・社会的状況
- 第14回：現代の経営経済学(2)
ー経営経済学の新たな展開
- 第15回：おわりに

【準備学習の指示】

適宜指示します。

【テキスト】

【参考文献】

若尾祐司/井上茂子編著『近代ドイツの歴史』ミネルヴァ書房、2005年。
海道ノブチカ/深山明編著『ドイツ経営学の基調』中央経済社、1994年。
その他、必要に応じて適宜指示する。

【コメント】

学期末試験により評価する。

講義名称	曜時
経営学史B <秋> (P.39)	火 4

【教員名称】野田 俊範

【講義概要】

経営学は、ドイツとアメリカにおいて 20 世紀初頭に成立した若い学問であり、これら両国および日本において、今日までめざましい発展を遂げてきた。日本における経営学は、ドイツ経営学を骨とし、アメリカ経営学を肉として発展してきたと言われるが、特に学問としての経営学の体系や方法論などの点で、ドイツ経営学によって多大の影響を受けてきたのである。

本講義では、そのドイツ経営学のなかでも特に経営社会学と呼ばれる学問の、生成・展開の歴史を概観する。あわせて、経営における人間過程に関する具体的現実としての経営社会政策についても取り上げる。

ドイツ経営社会学・経営社会政策の歴史を学ぶことを通じて、経営共同体の理念を中心概念とするドイツ的な経営思想の意義や可能性について考えてほしい。

【学習目標】

1. 経営社会学の歴史を学ぶ。
2. 経営社会政策の歴史を学ぶ。
3. ドイツ的経営思想・経営理念について考える。

【講義計画】

- 第 1 回：はじめに
 第 2 回：経営社会学の生成
 ー経営社会学とは何か
 第 3 回：古典派の経営社会学(1)
 ードイツ合理化運動の展開
 第 4 回：古典派の経営社会学(2)
 ー経営社会学の萌芽
 第 5 回：古典派の経営社会学(3)
 ー経営社会学と労働疎外…ブリーフスの労働疎外論
 第 6 回：近代派の経営社会学(1)
 ー技術と人間労働の和解…ポピッツ・グループによる研究
 第 7 回：近代派の経営社会学(2)
 ー技術の進歩と「労働の二極分化」…ケルン＝シューマンによる研究
 第 8 回：ドイツ的経営政策と経営理念(1)
 ーヘル・イム・ハウゼ的労資関係
 第 9 回：ドイツ的経営政策と経営理念(2)
 ー企業自主化の構想／立憲的工場制度
 第 10 回：ドイツ的経営政策と経営理念(3)
 ー経営共同体思考の展開
 第 11 回：共同決定と経営社会学(1)
 ードイツにおける共同決定制度
 第 12 回：共同決定と経営社会学(2)
 ー共同決定と経営社会学
 第 13 回：労働の人間化と経営社会学(1)
 ードイツにおける労働の人間化
 第 14 回：労働の人間化と経営社会学(2)
 ー労働の人間化と経営社会学
 第 15 回：おわりに

【準備学習の指示】

適宜指示します。

【テキスト】

【参考文献】

若尾祐司／井上茂子編著『近代ドイツの歴史』ミネルヴァ書房、2005 年。

面地豊『経営社会学の生成』千倉書房、1998 年。

その他、必要に応じて適宜指示する。

【コメント】

学期末試験により評価する。

講義名称	曜時
経営学特別講義－日本企業のグローバル戦略 <秋> (P.41)	月 3

【教員名称】櫻井 結花

インテ・英語による

【講義概要】

This class is designed especially for exchange students who are interested in Japanese firms and their business strategies in the global economy. The aim of this course is to examine various issues that contemporary Japanese companies have been facing with the changing business environment in the rapidly globalized economy. Lectures are given by guest speakers who have extensive experience in renowned Japanese trading companies and/or manufacturing companies.

【学習目標】

The aim of this course is to help students to understand major issues that Japanese companies have been facing with in the changing business environment and the global economy.

【講義計画】

- 第 1 回： Overview: The current world economy and Japanese economy
 第 2 回： Trade and investment relations between Japan and other countries
 第 3 回： The European Union in a changing global environment
 第 4 回： Japanese economic growth in the globalized economy
 第 5 回： Business strategies of Japanese firms after rehuman shock
 第 6 回： Challenges and perspective of Japanese firms
 第 7 回： Production system in the Japanese firms: Vertically integrated model
 第 8 回： Production system in the Japanese firms: Horizontally divided model
 第 9 回： Case study: Japanese electric appliance manufacturers
 第 10 回： Case study: Sogo shosha (general trading companies)I
 第 11 回： Case study: Sogo shosha (general trading companies)II
 第 12 回： Understanding culture in international business
 第 13 回： Thailand: the major destination of Japanese foreign direct investment
 第 14 回： China: a burgeoning economic powerhouse
 第 15 回： India: a fast growing market

【準備学習の指示】

You are encouraged to read three newspaper articles in relation to Japanese firms every day.

【テキスト】

【参考文献】

【コメント】

Attendance means participation which include in-class discussions and mini-tests.

講義名称	曜時
経済基礎 A 12<春> (P.52)	木 1

【教員名称】矢根 眞二

【講義概要】

テーマ： 入門 行動経済学： 日常の現実と経済モデル

●2年生で学ぶミクロ経済学やマクロ経済学のモデルの核心は「合理的経済人」ですが、私たちの日常はいたって非合理で怠惰なうえ、失敗してもすぐに忘れて自信過剰な気がしませんか。このギャップと謎を解くために、ノーベル経済学賞受賞者による心理学的な文庫本を読み通し、行動経済学の基礎を学びます。

【学習目標】

第1に、大学での学習力の基礎として、科学的な仮説や実験に関する読みやすい文庫本を通読することで、自分の読解力と要約力に自信を持つこと、第2に、これまでの日常生活で無意識のうちに犯してきた不合理な判断ミスを自覚すること、第3に、これらのスキルや知見を今後の日常生活や経済学学習に活用することです。

【講義計画】

第1回：何を、なぜ、どう、学ぶ？ 行動経済学と判断力

●ついつい私たちは物事を直感的に判断し、熟慮が必要な重大事でもその手間や努力を惜しんで失敗しがちです。さらに、本人が自分の判断ミスにも気づかず自信過剰のままであれば、同様の失敗を今後も繰り返すこととなります。毎学期繰り返される「履修判断」も、就職や結婚と同じく重要な判断ですから、その重要な情報提供を初回に提供します。「我事において後悔せず」を目指して、将来を見据えようとして「合理的に」判断・評価する練習を始めましょう。

第2回：「現実の自分」を知る？

第3回：2人の自分に気づくには？

第4回：熟慮様の機能とバイアスの原因

第5回：上機嫌な直感君には要注意

第6回：直感君が結論ありきの理由は？

第7回：ヒューリスティックの仕組みは？

第8回：Review 学習法と理解度の自己診断

第9回：偶然が引き起こす愚かなバイアスとは？

第10回：利用可能性ヒューリスティックとは？

第11回：代表性ヒューリスティックとは？

第12回：統計は苦手？

第13回：バイアスを修正するには？

第14回：井戸端会議の改善と授業内試験(100点)予定日

第15回：総括：行動経済学から経済学へ

【準備学習の指示】

上記の指定テキストの事前読解と、下記の教員サイトの授業スライドの問題練習が学習の基本です。

●経済学部教員サイト：<http://rio.andrew.ac.jp/~yane/>

【テキスト】

D.カーネマン『ファスト & スロー』上巻ハヤカワ文庫 Kindle 版(アマゾン)も利用可能です

【参考文献】

経済学がそもそも幸福の心理や倫理に根ざしていた点については、ロバーツ(2016)『スミス先生の道徳の授業』日本経済新聞社、行動経済学の史的展開については、セイラー(2016)『行動経済学の逆襲』早川、が図書館にある面白い読み物です。

【コメント】

初回に説明しますが、試験得点の6割以上が合格の原則です。ただし、授業中の質問や Review 等の積極的参加を考慮する場合があります。

講義名称	曜時
経済情報処理論 I <春> (P.55)	金 1

【教員名称】櫻井 雄大

【講義概要】

「経済情報処理論 I」と「経済情報処理論 II」は同一年度に履修することをお勧めします。Iで触れることができなかった部分はIIで扱います。

この講義では、主に経済学部生が今後の学習/研究活動に応用できるように、情報処理の技術や背景などについて説明します。

経済学に限らず、今日では情報処理は私たちの生活に無くてはならないものとなっています。人々の様々な活動を記録し、大量のデータを素早く正確に処理し、そこから得られる知見を様々な分野で活用するにあたり、「なぜ動くのか?」「どういうことができるのか、(現状では)できないのか?」「現在はどのように活用されているか?」「将来の応用可能性は?」といった点を押さえながら概説します。

【学習目標】

情報技術の基礎知識について学習し正しく理解することで、経済学およびその他社会科学の学習において情報技術を活用するための土台をつくり上げることを目標としています。

【講義計画】

第1回：イントロダクション(講義内容詳細説明、アンケート等)

第2回：情報の歴史(人は情報とどう向き合ってきたか)

第3回：情報社会の現状(インターネット、スマートフォンの台頭)

第4回：情報の数値化(デジタル化とはどういうことか、その利便性について)

第5回：コンピュータの歴史(登場から高性能化、汎用化、小型化へ)

第6回：コンピュータの仕組み1(部品の構成と役割)

第7回：コンピュータの仕組み2(基本ソフトウェアについて)

第8回：コンピュータの仕組み3(アプリケーションの概念)

第9回：ソフトウェア詳説1(データとプログラム)

第10回：ソフトウェア詳説2(プログラム言語の種類と特徴)

第11回：アルゴリズム概論(各種アルゴリズムの紹介)

第12回：コンピュータの仕組み4(ネットワークの仕組み)

第13回：インターネットとWWW

第14回：経済学、その他社会科学とコンピュータの関係

第15回：これまでの講義まとめ、最終試験

【準備学習の指示】

準備学習が必要な項目については、講義中に適宜指示します。また、必ず講義ノートを取り、それを参考に講義中に話した項目について調べなおすことで復習してください。

【テキスト】

【参考文献】

講義内で適宜提示します。

【コメント】

備考

出席は、不定期に実施する小テストの点数で評価する予定です。

講義名称	曜時
経済情報処理論Ⅱ <秋> (P.56)	金 1

【教員名称】櫻井 雄大

【講義概要】

「経済情報処理論Ⅰ」と「経済情報処理論Ⅱ」は同一年度に履修することをお勧めします。ⅡではⅠで触れなかった内容を扱います。

この講義では、主に経済学部生が今後の学習/研究活動に応用できるように、情報処理の技術や背景などについて説明します。

経済学に限らず、今日では情報処理は私たちの生活に無くてはならないものとなっています。人々の様々な活動を記録し、大量のデータを素早く正確に処理し、そこから得られる知見を様々な分野で活用するにあたり、具体的な利用実例を示しながら説明するとともに、プログラミングの基本項目など技術的な項目も解説します。

【学習目標】

情報技術の基礎知識について学習し正しく理解することで、経済学およびその他社会科学の学習において情報技術を活用するための土台をつくり上げることを目標としています。

【講義計画】

- 第1回：復習—コンピュータの仕組み
- 第2回：論理演算の基本
- 第3回：学内の情報環境について
- 第4回：経済学におけるコンピュータの活用 1(インターネット資源の調査と利用)
- 第5回：経済学におけるコンピュータの活用 2(データの統計処理)
- 第6回：経済学におけるコンピュータの活用 3(シミュレーション)
- 第7回：経済学におけるコンピュータの活用 4(数値解析)
- 第8回：経済学におけるコンピュータの活用 5(データマイニング)
- 第9回：経済学におけるコンピュータの活用 6(複雑系)
- 第10回：プログラミング詳説 1(プログラムが扱うデータの概念、型と構造)
- 第11回：プログラミング詳説 2(流れの制御—条件分岐と反復処理)
- 第12回：プログラミング詳説 3(処理の部品化—関数とライブラリ)
- 第13回：プログラミング詳説 4(現実とプログラムのマップ—アルゴリズムの選択と設計)
- 第14回：プログラミング詳説 4(制御と計測)
- 第15回：これまでの講義まとめ、最終試験

【準備学習の指示】

準備学習が必要な項目については、講義中に適宜指示します。また、必ずノートを取り、それを参考に講義中に話した項目について調べなおすことで復習してください。

【テキスト】

【参考文献】

講義内で適宜提示します。

【コメント】

備考
出席は、不定期に実施する小テストの点数で評価する予定です。

講義名称	曜時
国際経営論 B <秋> (P.68)	月 4

【教員名称】櫻井 結花

【講義概要】

国際経営論Bでは、国境を超えた経営活動を展開している企業に相応しい組織デザインや経営資源の活用法、経営の標準化と現地適応化の問題など、事例を参照しながら多角的に考察する。

【学習目標】

国際経営に関する基礎的な理論を理解し、企業の国際化の現状と諸問題について、それらの理論を適用して解釈できるようになることを目的とする。

【講義計画】

- 第1回：ガイダンス 「国際経営とは何か」授業概要と評価方法などに関する説明
- 第2回：多国籍企業の組織デザイン
- 第3回：グローバル統合とローカル適応
- 第4回：国際マーケティングの理論と実践
- 第5回：国際マーケティングの事例研究
- 第6回：海外生産と研究開発
- 第7回：海外生産と研究開発の事例研究
- 第8回：国際人的資源管理の理論と実践
- 第9回：国際人的資源管理の事例研究
- 第10回：国際パートナーシップ
- 第11回：国際パートナーシップの事例研究
- 第12回：イノベーションとナレッジマネジメント
- 第13回：豪州における日系企業の経営戦略
- 第14回：豪州ワイン産業のグローバル戦略
- 第15回：総括と期末試験

【準備学習の指示】

事前学習として、各回講義のテーマに沿った事例(企業)を新聞やニュースから探すこと。

事後学習として、小テスト実施後に解答に関する解説を行うので、各自振り返りを行うこと。

【テキスト】

【参考文献】

中川功一、林正、多田和美、大木清弘 (2015) 「はじめての国際経営」有斐閣ストウディア

【コメント】

評価の対象となりえる出席とは、教室に座っているだけのことを意味するものではありません。授業内小テストを受ける、グループディスカッションに参加する、発言をするといった授業に主体的に参加し学びに貢献することです。

講義名称	曜時
国際社会福祉論 [2] <秋> (P.70)	火 1

【教員名称】齋藤 かおる

【講義概要】

どの国にも、固有性、すなわち固有の国内状況と価値観（メンタリティ）の傾向性があります。

そこで、どの国も、一方において、それぞれの固有性のもとで独自の福祉政策を進めています。

けれど、多くの国は、他方において、国際社会が掲げる理念・標準に沿う努力も続けています。

それは、多くの国が、他国との協調なしには国際的に存続できないことを知っているからです。

また、多くの国が、状況や価値観を超えて、人間の尊厳に対する意識を共有しているからです。

従って、他国の福祉を学ぶことは、もちろん【自国の福祉進展】の考察に役立つばかりでなく、

【自国による国際貢献】の可能性の考察にも役立つと言えます。

本講義は、ヨーロッパの福祉の概観を通して、日本の福祉の現状・課題・可能性を考察します。

そして、受講者の皆さんの【社会】と【福祉】と【命】に関する思索の拡張深化を支援します。

【学習目標】

福祉の進展とは社会の成熟であることへの理解を深めましょう。

【講義計画】

第1回：【幸福】という概念には国際標準がない

第2回：【健康】という概念には国際標準がある： WHO（世界保健機構）による定義

第3回：オランダの社会福祉①： ワークシェアリングの成功

第4回：オランダの社会福祉②： 薬物・売買春・安楽死の合法化

第5回：イタリアの社会福祉①： バザリアらによる精神保健福祉改革（精神科病院の全廃）1

第6回：イタリアの社会福祉②： バザリアらによる精神保健福祉改革（精神科病院の全廃）2

第7回：イタリアの社会福祉③： バザリア改革・社会的協同組合・倫理銀行

第8回：ドイツの社会福祉： 日本と真逆のワークフェア？

第9回：ユダヤ人はどこに？ どんなふう？

第10回：イギリスの社会福祉： 【ゆりかごから墓場まで】を支える【チャリティ】と【自助努力】

第11回：フランスの社会福祉： 【自由・平等・博愛】の到達点としての先進的【家族政策】

第12回：スウェーデンの社会福祉： 岐路に立つ【雇用と福祉の連携】

第13回：スイス・ベルギー・フィンランドの社会福祉： 【教育】は最大の軍備？

第14回：教会・修道院・慈善団体・互助組織の伝統

第15回：総括と質疑応答

【準備学習の指示】

日々、情報に注意を払い、福祉に関する国内外の情勢の把握を心がけましょう。

日々、既存の価値観（自己の価値観）に囚われぬ丁寧な思考を心がけましょう。

【テキスト】

【参考文献】

【コメント】

出席状況が良好でない場合、試験答案は評価の対象外となります。

講義名称	曜時
自然科学－生物学 I <秋集> (P.77)	火 1 / 金 1

【教員名称】巖 圭介

【講義概要】

バイオテクノロジーの台頭と環境問題への注目により、生物学は21世紀の社会でよくも悪くも中心的な位置を占めることになる。遺伝子や生態系に関する正しい理解がなければ、さまざまな社会問題に正しく対応し判断をくだすことは難しい。この時代に対応するためにも、生物というものの基本を正しく理解しておいてほしい。

生物の基本、それはすべての生物が37億年にわたる生命の進化の産物であるということ。進化という現象を抜きにして生物のいかなる側面も語ることはできない。にもかかわらず、進化を正しく理解している者はきわめて少ない。この授業では、進化を軸にして生命現象のいくつかの重要な側面について概説する。

【学習目標】

①この地球に生息する多種多様な生物たちの命の不思議、生き方の不思議、生物同士の関わり合いの不思議に興味を持つ。②生物が進化するそのメカニズムについて人に説明できる。③講義で取り上げるいくつかのトピックについて、人にわかるように説明できる。

【講義計画】

第1回：イントロダクション

第2回：生命の起源

第3回：生命の分化と共生

第4回：爆発的多様化と絶滅

第5回：多様化の仕組み

第6回：第1回イン・クラス・レポート：生命の歴史

第7回：イン・クラス・レポートふりかえり DNA 1

第8回：DNA 2

第9回：進化のメカニズム

第10回：自然選択

第11回：自然選択と中立説

第12回：第2回イン・クラス・レポート：進化のメカニズム

第13回：イン・クラス・レポートふりかえり 性の進化 1

第14回：性の進化 2

第15回：性差の進化

第16回：性比の進化

第17回：第3回イン・クラス・レポート：性の進化

第18回：イン・クラス・レポートふりかえり 利他性の進化

第19回：真社会性の進化

第20回：血縁選択と近親交配

第21回：ヒトの協力的行動

第22回：生物多様性保全 1

第23回：生物多様性保全 2

第24回：生物多様性保全 3

第25回：生物多様性保全 4

第26回：第4回イン・クラス・レポート：生物多様性保全

第27回：イン・クラス・レポートふりかえり 人類の進化 1

第28回：人類の進化 2

第29回：共進化

第30回：総復習

【準備学習の指示】

日常目にする生物関係のニュースなどをチェックし、常に情報をとりいれておくこと。授業では板書の負担を軽減するため穴埋めプリントを配付するが、その穴を埋めるだけで済むわけではない。ノートをとって、配付資料の内容と授業後に統合して整理することで、はじめて十分な理解ができるはずなので、次の授業までにきちんと復習をすること。

【テキスト】

【参考文献】

酒井、高田、近「生き物の進化ゲーム 大改訂版」共立出版 2012、桑村哲生『生命の意味』裳華房 2001年、長谷川眞理子『進化とはなんだろうか』岩波ジュニア新書 1999年、ワイナー『フィンの嘴』早川書房 2001年、長谷川眞理子『クジャクの雄はなぜ美しい？』紀伊國屋書店 1992年、ドーキンス『利己的な遺伝子』紀伊國屋書店 1991年 他、適宜紹介する。

【コメント】

イン・クラス・レポートとは、授業時間中に課題として、その場で書き上げて提出してもらおうレポートで、その時点まで数回分の講義内容を振り返りまとめてもらうことを目的として4回実施する予定。レポートをすべて提出した上で、試験で6割程度得点すれば単位を与える。

講義名称	曜時
日本語学概論 <春集> (P.127)	火2/金3

【教員名称】有川 康二

【講義概要】

ONE PIECE のルフィが涙や鼻水を流しながら「仲間がいるよ！」って叫んでるけど、「る」ってちょっと変。なぜ？でも、なんとなくわかる。なぜ？「ゴミ箱」は[gomibako]だけど、[gomihako]は変。なぜ？「やせたロバの飼い主」と「やせたロバと飼い主」では意味が違う。なぜ？「猫が金魚を食べた」はOK。でも、「猫が金魚が食べた」は変。なぜ？「が」とか「を」って何？「が」と「を」について4ヶ月間徹底的に考えます。「が」とか「を」は母なる自然がつくったウイルスです。ヒト脳内の言語システムは母なる自然がつくったウイルスチェックシステムなんです。意味不明でしょうが、授業を受けるのと分かります(微笑)。「が」と「を」について徹底的に考えるのは、みなさんの人生で最初で最後の経験となります。日本語のネイティブスピーカーは日本語を文法など意識せずに自由に使えます。日本語はアホほど当たり前のことです。アホほど当たり前のことなので、日本語母語話者は、自分は日本語のことは何でも知っていると思ひ込みます。しかし、日本語母語話者には意識できない日本語の音や文法の法則やメカニズム、それがヒト脳内で如何に生成されるかは説明できません(まず、この文の重要性が理解できません)。誰でも脳味噌は使えますが、その法則やメカニズムは説明できません。経験科学の手法を用いてヒト脳の言語システムの法則とメカニズムを探ります。科学は、誰もが当たり前すぎず考えるのもアホらしいと思う事柄に驚嘆することから始まります(驚)。子どもはアホなことに驚嘆できるというすばらしい能力の持ち主です。長年の学校教育で失いかけたこのすばらしい能力を、この授業で取り戻してみませんか？「自然言語(ことばをしゃべる)」というアホらしい現象は、物理学の最重要問題である「重力(ものが落ちる)」や「光(明るい・暗い)」というような一見アホらしい現象と同じように、科学の格好の対象となります。鳥は空を飛びまわります。魚は水の中を泳ぎまわります。植物は花を咲かせまわります。犬は臭いを嗅ぎまわります。私たちヒトはしゃべりまわります。しゃべりまくる生物であるヒトとは、一体、如何なる生き物であるのか？一緒に考えてみませんか？

【学習目標】

日本語を三つの視点から概論します。(1) 生物言語学の視点＝ヒト自然言語システムは、母なる自然が創造したヒト脳に突然変異と創発的自己組織化が生じて出現した。その一般的性質とはどのようなものか？(2) 日本語教育学の視点＝日本語を外国語として学ぶ人々にとって、日本語の客観的な説明、よりよい説明とはどのようなものか？(3) 哲学的視点＝今この瞬間も時速10万8千km(弾丸速度の約19倍)で太陽のまわりを公転している地球の表面に重力でへばりつけられて、自分は今ここで何をしているのか？約138億年前にできた宇宙の中で、46億年前にできた地球の上で、38億年前に生まれた生命のナレノハテとして、何を、老いて、死んでいくのか？このようなことを日本語でうたうだと考えている自分にとって、日本語とは何なのか？こんなことは大学とお寺でしか言われません(細かいことや最後のことは大学でだけ)。落ち着いて一緒に徹底的に考えてみましょう。

【講義計画】

- 第1回：イントロ。「もの」とは何か。「こころ」とは何か。(1)
- 第2回：「もの」とは何か。「こころ」とは何か。(2)
- 第3回：「もの」とは何か。「こころ」とは何か。(3)
- 第4回：「もの」とは何か。「こころ」とは何か。(4)
- 第5回：「もの」とは何か。「こころ」とは何か。(5)
- 第6回：「よい説明」とは何か。(1)
- 第7回：「よい説明」とは何か。(2)
- 第8回：「よい説明」とは何か。(3)
- 第9回：「よい説明」とは何か。(4)
- 第10回：「よい説明」とは何か。(5)
- 第11回：言語の構造(1)
- 第12回：言語の構造(2)
- 第13回：言語の構造(3)
- 第14回：言語の構造(4)
- 第15回：言語の構造(5)
- 第16回：脳とコンピュータ(1)
- 第17回：脳とコンピュータ(2)
- 第18回：脳とコンピュータ(3)
- 第19回：脳とコンピュータ(4)
- 第20回：脳とコンピュータ(5)
- 第21回：ウイルスチェックシステムとしてのヒト自然言語システム(1)
- 第22回：ウイルスチェックシステムとしてのヒト自然言語システム(2)
- 第23回：ウイルスチェックシステムとしてのヒト自然言語システム(3)
- 第24回：ウイルスチェックシステムとしてのヒト自然言語システム(4)
- 第25回：ウイルスチェックシステムとしてのヒト自然言語システム(5)
- 第26回：復習とQ&A
- 第27回：復習とQ&A
- 第28回：復習とQ&A
- 第29回：復習とQ&A
- 第30回：復習とQ&Aと試験

【準備学習の指示】

前にやったことを順次理解していかないと、だんだん、珍漢漢(ちんぶんかんぶん)になります。予習、復習をしてください。

【テキスト】

【参考文献】

- Jenkins, L. (2000) *Biolinguistics - Exploring Biology of Language*. Cambridge University Press.
- 酒井邦嘉(2002)『言語の脳科学-脳はどのようにことばを生みだすか』中公新書
- 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版

【コメント】

毎回の出席は前提です。筆記試験は、自筆ノートやプリントは持ち込み可です。丸暗記は不要です。何故そういう風に考えるのかというロジックに集中してください。毎回、配付する質問コメント用紙(出席カードではありません)にいい質問やいいコメントをした人は、ボーナス点として加算されます。

講義名称	曜時
日本語教授法 I <通期> (P.128)	金5

【教員名称】有川 康二

【講義概要】

どんな教授法(教え方の哲学や方法)、どんな教科書にも長所と短所があります。要は、様々な教授法や教科書の長所をなるべく多く利用することです。そのためには、何が長所で、何が短所になるのかを理解しておかなければなりません。例えば、語学学習の命であるドリル(稽古)に関していえば、機械的な形の練習だけでなく、より現実に近い状況や会話の十分な練習があれば長所と言えます。日本語の初級文法に焦点を絞り、(教師のための)実践的な文法整理と、(学習者のための)効果的なドリルの紹介やシミュレーションを行います。

【学習目標】

一定の制限された状況(教室)や時間内(初級の集中コースとして例えば週15時間で約6か月)に、日本語を母語としない人に日本語文法全体の基礎的な体系を順序よく説得的に説明し、効果的に練習(ドリル)を行い、「使える日本語」を身につけてもらうためには、教える側に特別の知識と技術が必要となります。何語でもそうですが、ある言葉が母語としてべらべら話せることと、その言葉を外国語として学習する人に体系的、説得的に教えることのできる能力とは別物です。日本語の母語話者は日本語学習者と適当に世間話ができますが、初級の学習者に日本語の文法や文パターンを効果的、説得的に教えることはできません。初級レベルで学習者が興味を失ってしまったら、それまでです。ある意味では初級レベルが最も難しいと言えます。文法の質問から逃げる日本語教師は学習者には信頼されません。また同時に、「何故、私は外国語を学ぶのか？何故、私は日本語を外国語として教えるのか？日本語を教えるという仕事を通して私には何ができるのか？」という問いを問い続けなくてはならないと思います。

【講義計画】

- 第1回：イントロ
外国語教授法のイロハとは何か？どんな授業がよいのか？どんな教材が必要なのか？どんな仕事に就ける可能性があるのか？本学の先輩達は日本語教員資格を取得してどんな所で仕事をしているのか？
- 第2回：指示表現(コソアド)(1)
- 第3回：指示表現(2)
- 第4回：形容詞(イ形容詞/ナ形容詞)(1)
- 第5回：形容詞(2)
- 第6回：存在表現(アル/イル)(1)
- 第7回：存在表現(2)
- 第8回：時制(テンス)と相(アスペクト)(1)
- 第9回：時制(テンス)と相(アスペクト)(2)
- 第10回：保留形(テ形)(1)
- 第11回：保留形(テ形)(2)
- 第12回：願望の助動詞(ta/gar)(1)
- 第13回：願望の助動詞(2)
- 第14回：可能の助動詞(e/(ra)re)(1)
- 第15回：可能の助動詞(2)
- 第16回：様態・伝聞・推量の助動詞(アノばんハオイソウダ/オイシイソウダ/オイシヨウダ/オイシイラシイ)(1)
- 第17回：様態・伝聞・推量の助動詞(2)
- 第18回：テイル・テアル・テオク(窓が開イテイル/窓ガ(ヲ)開ケテアル/窓ヲ開ケテオク)(1)
- 第19回：テイル・テアル・テオク(2)
- 第20回：授受表現((テ)モラウ/イタダク,(テ)クレル/クダサル,(テ)ヤル/アゲル/サシアゲル)(1)
- 第21回：授受表現(2)
- 第22回：態(受身(イジメラレル)・使役(イジメサセル)・使役受身(イジメサセラル)) (1)
- 第23回：態(2)
- 第24回：条件表現(離婚シタラ〜/離婚スルナラ〜/離婚スレバ〜/離婚スルト〜)(1)
- 第25回：条件表現(2)
- 第26回：敬語(お話しニナル/お話しスル/おっしゃる/申ス/ナサル/イタス等)(1)
- 第27回：敬語(2)
- 第28回：復習とQ&A
- 第29回：復習とQ&A
- 第30回：復習とQ&Aと試験

【準備学習の指示】

本学には世界の様々な国から留学生が来て日本語や日本文化について勉強しています。留学生の人たちと話をしてみてください。

【テキスト】

東京 YMCA 日本語学校 4-87138-138-2 入門日本語教授法創拓社

【参考文献】

- 三浦昭(1983)『初級ドリルの作り方』凡人社
- 岡崎敏雄(1989)『日本語教育の教材-分析・使用・作成』アルク
- Makino, S. and Tsutsui, M. (1986) A dictionary of basic Japanese grammar-日本語基本文法辞典. The Japan Times.

【コメント】

毎回の出席は前提です。筆記試験は、自筆ノートやプリントは持ち込み可です。丸暗記は不要です。何故そういう風に考えるのかというロジックに集中してください。毎回、配付する質問コメント用紙(出席カードではありません)にいい質問やいいコメントをした人は、ボーナス点として加算されます。

講義名称	曜時
日本語教授法Ⅱ [4] <通期> (P.128)	水 1

【教員名称】友沢 昭江

【講義概要】

日本語学習者の多様化に対応するためにさまざまな教授法や教材が開発されています。実際の教育に携わる者は、学習者の学習目標や言語背景などを考慮に入れ、最も効果的な成果をあげるために最適な教授法や教材を選択する眼をもたなければなりません。本講では教授法Ⅲで行う模擬授業などに必要な教授法の基本と教材の分析研究を中心に学びます。

【学習目標】

この授業の目標は日本語を教えるのに必要な基礎的な知識（日本語に関すること、教授法に関すること）を獲得すること、一般によく使用されている教科書をグループに分かれて詳細に分析し発表することです。

【講義計画】

- 第1回：日本語を教えるということ（1）：授業を組み立てるために必要な基礎知識
- 第2回：日本語を教えるということ（2）
- 第3回：いろいろな外国語教授法（1）
- 第4回：いろいろな外国語教授法（2）
- 第5回：初級の教え方（発音／会話）（1）
- 第6回：初級の教え方（発音／会話）（2）
- 第7回：初級の教え方（文字／読解）（1）
- 第8回：初級の教え方（文字／読解）（2）
- 第9回：初級の教え方—ビデオ視聴（1）
- 第10回：初級の教え方—ビデオ視聴（2）
- 第11回：初級の教え方—初級教科書の分析（1）
- 第12回：初級の教え方—初級教科書の分析（2）
- 第13回：初級の教え方
- 第14回：中間試験
- 第15回：中間試験の講評
- 第16回：中上級の教え方—初級との違いについて
- 第17回：中級教科書の分析（1）
- 第18回：中級教科書の分析（2）
- 第19回：上級教科書の分析
- 第20回：目的・技能別教科書の分析
- 第21回：インターネット利用の日本語学習
- 第22回：日本国内と海外で用いられる教授法と教科書
- 第23回：予備日
- 第24回：教科書分析のグループ発表（1）
- 第25回：教科書分析のグループ発表（2）
- 第26回：教科書分析のグループ発表（3）
- 第27回：教科書分析のグループ発表（4）
- 第28回：一年間の講義のまとめ
- 第29回：期末試験
- 第30回：期末試験の講評（テストを評価につなげるとはどのようなことか。）

【準備学習の指示】

講義期間中に教科書の内容をすべて扱うことができないので、早めに購入して読み進めてほしい。できれば講義が始まるまでに最後まで目を通して、扱われている項目についてある程度の知識をもっておいください。履修要件ではないですが、この授業を履修する前または同時に、日本語教師資格に必要な科目群 A および B 群をできるだけ多く履修しておいてください。

【テキスト】

高見澤孟 9784-87217-515-8 新・はじめての日本語教育 2 一日本語教授法入門アスク出版 2004 年

【参考文献】

- ・『新・はじめての日本語教育 1—日本語教育の基礎知識』（高見澤孟他、アスク）
- ・『ここから始まる日本語教育』（姫野昌子他、ひつじ書房）
- ・『初級ドリルの作り方』（三浦昭、凡人社）
- ・『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』（庵功雄他、スリーエーネットワーク）
- ・『中上級を教える人のための文法ワークブック』（庵功雄他、スリーエーネットワーク）
- ・『ベーシック日本語教育』（佐々木泰子編、ひつじ書房）

【コメント】

春学期末と秋学期末に試験を行います（合計2回、50%）。それ以外にも授業での発言、課題、グループ発表（30%）、および出席状況（20%）を総合的に考慮して評価を行います。資格関連の科目なので、出席は重要視されますが、それだけではなくすべての課題をしあげることがより重要です。

講義名称	曜時
日本語文法論 <秋集> (P.129)	火 2 / 金 1

【教員名称】有川 康二

【講義概要】

消化の法則とメカニズムを理解するために胃腸という臓器（食物（情報）を分解、吸収する消化システム）を調べます。免疫の法則とメカニズムを理解するために血液やリンパ系細胞等の免疫システム（情報を守る器官）を調べます。この授業では、ヒト自然言語の情報処理の法則とメカニズムを理解するためにヒト脳という臓器（情報を処理するシステム）を調べます。といっても、脳を解剖したり（簡単にどこでもできません）、1台何億円もするMRIを使って脳を調べるわけではありません。実際、解剖やCTでは言語システムで働く文法の詳しい法則や仕組みは全然分かりません。私達各々が自分の母語（韓国語、中国語、日本語など）を使って、つまり、各々が自分の脳の働きを徹底的に観察して、実験（思考実験）を行い、言語現象の論理的な説明をしていきます。母なる自然の創造したヒト脳（1300gのタンパク質の塊）という情報処理システムで働く法則とメカニズムの説明を行います。紙と鉛筆があればできます。

【学習目標】

人間の脳の言語システムは、母なる自然が創った複雑な情報処理システムです。言語システムの意味と構造の情報処理の法則とメカニズムを調べます。例えば、「太郎は毎日料理と掃除をする」とか「John cooks and cleans everyday」はOK、「太郎は毎日料理を掃除をする」は変。「John knows Mary」はOK、「太郎は花子を知る」は変。「象は鼻が長い」の主語は？「花子が太郎が好きなこと」では主語は二個？「あ、雨だ！」では主語はない？「昨日は寒かった」はOK、「It colded yesterday」は変。「もうご飯食べた？」と聞かれて、「うん、食べた」はOK、「いや、まだ食べなかった」は変。「猫は金魚を食べた」「猫が金魚を食べた」「猫が金魚は食べた」「金魚は猫が食べた」「金魚が猫に食べられた」「金魚を猫に食べられた」はどう違う？「は」「が」「を」の意味はあるのか、ないのか？「猫を金魚を食べた」は変だが、このような変な例は、なぜ、変なのか？頭の中ではどんな言語情報の計算が行われているのか？このような問題を考えながら、母なる自然の創造したヒト脳の自然言語情報処理システムの法則とメカニズムを炙り出していきます。

【講義計画】

- 第1回：イントロ。ヒト脳の自然言語システムの法則とメカニズムを調べるには、どうしたらいいか。ヒト脳の文に対する容認性反応（OKか、変か、どの程度、変か）を調べることは、私たち一人一人が自分の脳を使って行う実験だ。
- 第2回：日本語学習者のミスから日本語の法則を探る（1）
- 第3回：日本語学習者のミスから日本語の法則を探る（2）
- 第4回：品詞分類テスト（言語情報検出のリトマス試験紙）（1）
- 第5回：品詞分類テスト（2）
- 第6回：品詞分類テスト（3）
- 第7回：主語とは何か？（「～は」「～が」が主語という定義は間違い）（1）
- 第8回：主語とは何か？（2）
- 第9回：主語とは何か？（3）
- 第10回：活用とは何か？（国語で習った活用表は矛盾だらけ）（1）
- 第11回：活用とは何か？（2）
- 第12回：活用とは何か？（3）
- 第13回：二種類の「た」（「もう食べた？」「いや、まだ食べなかった。」が変なわけ）（1）
- 第14回：二種類の「た」（2）
- 第15回：二種類の「た」（3）
- 第16回：格助詞の「格」とは何か？（言語情報処理におけるウィルスチェックのメカニズム）（1）
- 第17回：「格」とは何か？（2）
- 第18回：「格」とは何か？（3）
- 第19回：「格」とは何か？（4）
- 第20回：言語システムの自己組織化（「食べれる」のような「ら」抜き言葉はちゃんと法則に従っているし、計算／伝達効率もよい。むしろ、「ら」入りの「食べられる」のほうが法則を無視しており、計算／伝達効率も悪い。）（1）
- 第21回：言語システムの自己組織化（2）
- 第22回：言語システムの自己組織化（3）
- 第23回：言語システムの自己組織化（4）
- 第24回：言語情報計算における経済性原理（言語システムで物理法則が働いている）（1）
- 第25回：言語情報計算における経済性原理（2）
- 第26回：言語情報計算における経済性原理（3）
- 第27回：言語情報計算における経済性原理（4）
- 第28回：復習とQ&A
- 第29回：復習とQ&A
- 第30回：復習とQ&Aと試験

【準備学習の指示】

前にやったことを順次理解していかないと、だんだん、珍糞漢糞（ちんぶんかんぶん）になります。予習、復習をしてください。

【テキスト】

【参考文献】

- 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 宮本陽一(2009)『生成文法の展開—「移動現象」を通して』大阪大学出版会

【コメント】

毎回の出席は前提です。筆記試験は、自筆ノートやプリントは持ち込み可です。丸暗記は不要です。何故そういう風に考えるのかというロジックに集中してください。毎回、配付する質問コメント用紙（出席カードではありません）にいい質問やいいコメントをした人は、ボーナス点として加算されます。

講義名称	曜時
日本事情 B [外国人留学生用] <秋> (P.130)	金 3

【教員名称】友沢 昭江

【講義概要】

この授業は外国人留学生を対象とするもので、彼らをもっとも関心をもつ現代日本社会のさまざまな領域についてテーマを決めて考察します。日本社会についての知識をえるというよりは、なぜそういう現象となるのかについてディスカッションを通じて学生自身が考え、自分の意見をまとめることをめざします。ディスカッションの幅を広げるために、日本語教師をめざす学生にも参加を求めます。春学期に引き続き開講しますが、大きなテーマはほとんど同じですが、具体的な内容は春学期とは異なるものを扱うので、春、秋と続けるの履修も可能です。春に続けて授業の中で「俳句と川柳」について学び、実際に作成し、学内外の日本人に評価とコメントをもらいます。書道など実技も行います。

【学習目標】

その時々に応じたタイムリーなテーマを設定し、それに関する新聞記事を読んだりテレビ番組などを見ます。その後、それを土台にしてディスカッションを行い、お互いの意見交換をめぐらします。テーマごとに簡単な課題を提出します。新しい単語や表現がどんどん導入されるので、使い慣れた日本語辞書を持参してください。扱うテーマは現代日本の社会、文化、経済、政治、教育、娯楽などさまざまです。授業は基本的にすべて日本語で行うので、中級以上の日本語能力をもつ学生が対象となります。日本語による活発な意見交換を行うことで日本語能力も養うことをめざします。

【講義計画】

第1回：授業の目標説明と参加学生の自己紹介、および日本について関心のあるテーマを各自が考える

第2回：日本の伝統文化（1）

第3回：日本の伝統文化（2）

第4回：日本の近代（1）

第5回：日本の近代（2）

第6回：現代の世相（1）東京と大阪

第7回：現代の世相（2）若者、高齢化、少子化

第8回：現代の世相（3）日本とアジアの関係

第9回：俳句と川柳（作品に挑戦）

第10回：日本の教育問題（1）

第11回：日本の教育問題（2）

第12回：俳句と川柳（書道に挑戦）

第13回：学生によるプレゼンテーション（1）

第14回：学生によるプレゼンテーション（2）

第15回：学生によるプレゼンテーション（3）

【準備学習の指示】

日本語のみで行う授業なので、内容が理解できるようなレベルまでしっかりと日本語能力を高めるようにしてください。テレビのニュースを聞いたり新聞などを読んで、現代の日本社会の抱える問題などにも目をむけておく姿勢を持ってください。

【テキスト】

【参考文献】

授業の内容に関連する資料は適宜授業内で配ります。関連する映像（テレビ番組など）やインターネットへアクセスするなどして、視覚的な情報を多く使います。

【コメント】

出席を第一に重視します。また新聞記事やテレビ番組を見て討論をした後、学んだ語彙や表現についての小テストのほか、まとめの課題や各自が選んだ「日本」についての発表（一人15分程度）、授業への参加姿勢などを総合的に判断します。出席（30%）、小テスト（30%）、発表（40%）の割合で成績を判断します。

講義名称	曜時
比較文化研究－インドネシアと日本の音楽文化 <通期> (P.134)	金 3

【教員名称】由比 邦子

【講義概要】

インドネシアと日本は地域も民族も文化も異なるが、東南アジアもしくは東アジアの域内における位置関係、さらにインドもしくは中国という古代の大国の影響を色濃く受けているという点で共通性がある。そして、両国の音楽および上演芸術には明らかな類似性、またその反面、似て非なる相違点が見られる。本講義では、“大規模器楽合奏”と“音楽と演劇の結びつき”を2つのキーワードとして、両国の古典音楽、古典的上演芸術の諸相を対照させて論じる。加えて、両国の意外な接点を楽器と音楽の双方について紹介する。

【学習目標】

音楽は、それを生み出す人間が属する文化の脈絡内で理解しなければならぬ。したがって、「音楽は世界共通の言語ではない」ということをしっかりと認識できるようにする。

【講義計画】

第1回：オリエンテーション～インドネシアと日本の文化的背景

第2回：音楽から見た日本文化と「インドネシア文化」

第3回：日本初の外来音楽（雅楽）

第4回：日本初の音楽と演劇の結合（能の謡と囃子）

第5回：江戸時代に発達した劇場音楽（長唄）

第6回：インドネシアの代表的な合奏形態（ガムラン）

第7回：ドレミファソラドではない音階

第8回：ゴングの生成と発展

第9回：ゴング・チャイムと八丁鉦

第10回：日本とインドネシアの交差点～木琴

第11回：上演芸術という考え方

第12回：インドネシアの影絵人形劇（1）

第13回：インドネシアの影絵人形劇（2）

第14回：インドネシアの仮面舞踊劇

第15回：試験およびまとめ

第16回：上演芸術の中核としての舞踊

第17回：インドネシアの舞踊劇の今昔

第18回：演劇としての能

第19回：能における音楽の機能

第20回：大衆娯楽としての歌舞伎

第21回：歌舞伎の所作事

第22回：歌舞伎と能の関係

第23回：人形浄瑠璃の世話物と時代物

第24回：人形が泣けば人も泣く仕掛け

第25回：演者としての人形と人間の関係

第26回：上演芸術を育む環境

第27回：部外者の目がもたらした変容

第28回：型の組み合わせによる創作

第29回：インドネシアと日本の架け橋～「ブンガワン・ソロ」

第30回：試験およびまとめ

【準備学習の指示】

日本音楽史を概観するためには日本史の知識が必要となる。本講義では、古代・中世・近世の音楽を取り上げるので、各時代の社会・文化的背景をしっかりとらえておくこと。

また、『東南アジアを知る事典』（平凡社）を読むことで、インドネシアについての基礎知識を身につけておくこと。

【テキスト】

【参考文献】

柘植元一・植村幸生編『アジア音楽史』（音楽之友社）

櫻井哲男『アジア音楽の世界』（世界思想社）

皆川厚一編『インドネシア芸能への招待』（東京堂出版）

月溪恒子『日本音楽との出会い』（東京堂出版）

今岡謙太郎『日本古典芸能史』（武蔵野美術大学出版局）

【コメント】

春学期試験40%、秋学期試験40%、不定期に実施するミニッツペーパー20%

講義名称	曜時
比較文化研究－日韓の暮らしと文化 <通期> (P.135)	火 1

【教員名称】崔 杉昌

【講義概要】

民俗学および文化人類学の手法を用いて、日韓の現代社会における多様な文化事象を取り上げ、一般庶民の暮らしや生活文化を正しく理解し合うことを目的とする。春学期には生活文化を理解するための民俗学や文化人類学の学問的性質を理解したうえで、日本の民俗文化の事例を中心に自文化に対する理解を深めていく。秋学期には韓国や近隣諸国と関連する文化事象を取り上げることとする。場合によっては日本文化と照合しながら文化の普遍性と特異性について議論していきたい。本講義ではいっそうの理解を深めるためDVDや動画、記事などの関連資料も教材として取り扱う。

【学習目標】

- ・比較文化研究方法論として、民俗学・文化人類学の手法を身につける。
- ・自文化・異文化についての理解度を深める。
- ・家・家族・近隣社会（地域）を柱とする比較文化研究の視座を培う。

【講義計画】

- 第1回：授業のオリエンテーション
講義内容の案内と周知事項の説明
- 第2回：民俗学の生い立ちと現在
－現代学としての民俗学－
- 第3回：柳田国男と民俗学
- 第4回：民俗学の誕生（映像）
- 第5回：民俗学とフィールドワーク
- 第6回：村社会の今
- 第7回：地域社会の再生と活性化
- 第8回：通過儀礼－出産の民俗
- 第9回：若者の民俗－寝屋子制度
- 第10回：若者の民俗－恋愛・結婚
- 第11回：巡礼－四国遍歴
- 第12回：葬式－両墓制の民俗
- 第13回：村祭祀－宮座とはなにか
- 第14回：都市の民俗－祇園祭①
- 第15回：都市の民俗－祇園祭②
- 第16回：異文化へのまなざし
- 第17回：名前からみた韓国社会と儒教の文化
- 第18回：両班の村－河回タルチュム（仮面劇）
- 第19回：日韓の食文化と作法
- 第20回：食文化－キムチと焼肉
- 第21回：食文化－儀礼食
- 第22回：韓国の伝統遊び
- 第23回：韓国の若者文化
- 第24回：通貨儀礼としての兵役
- 第25回：現代韓国の結婚事情
- 第26回：在日社会と多文化共生
- 第27回：大阪ラブ&ソウル（映像）
- 第28回：韓国の村と村祭り
- 第29回：変わりゆく葬礼文化
- 第30回：まとめ

【準備学習の指示】

テキストを持参すること。
指示に従い事前にテキストを読んでくること。
自文化・異文化理解への積極的な姿勢が求められる。

【テキスト】

八木透編 こんなに面白い民俗学ナツメ社

【参考文献】

八木透編『新・民俗学を学ぶ』昭和堂
福田アジオ ほか 『図説日本民俗学』吉川弘文館
長迫英倫『それでも不思議な韓国 やさしい日韓比較文化考』文芸社
金栄勲『韓国人の作法』集英社新書

【コメント】

- ・初日のオリエンテーションには必ず出席すること。
- ・就活などを理由に持続的な授業参加が見込めない学生は受講を遠慮していただきたい。
- ・学外授業として国立民族学博物館（吹田）の見学およびコアタウン（桃谷）へのフィールドワークを行う予定である（代替授業として土曜日に実施予定）。
- ・祇園祭の見学

講義名称	曜時
ボランティアコーディネート論 <秋> (P.144)	月 5

【教員名称】脇坂 博史

【講義概要】

ボランティア活動は、ボランティアを求める側と、支援する側によって成り立ちます。そのためにコーディネーションは不可欠です。ボランティアコーディネーションの実際と、ボランティアグループとコーディネーターの関係を中心に考えます。

【学習目標】

ボランティア活動を有効に進めるため、コーディネーターの役割、さまざまな圏域の活動、最近のボランティア、NPOの活動実際等を学習し、自身の活動にどのように活かせるかを学習します。

【講義計画】

- 第1回：授業と評価のガイダンス（必ず出席のこと）
- 第2回：ボランティア活動支援室から
- 第3回：ボランティア活動の原則
- 第4回：ボランティアコーディネーターの役割①
- 第5回：ボランティアコーディネーターの役割②
- 第6回：コーディネーターの関わり方①
- 第7回：コーディネーターの関わり方②
- 第8回：コーディネーターの関わり方③
- 第9回：ワークショップ①
- 第10回：ワークショップ②
- 第11回：訪問報告①
- 第12回：訪問報告②
- 第13回：ワークショップ③
- 第14回：活動発表①
- 第15回：活動発表②

【準備学習の指示】

ボランティアコーディネーションを学ぶにあたって、①自身がボランティア活動を体験しておくこと、②ボランティア関連書籍を読んでおくこと。

【テキスト】

【参考文献】

「市民社会の創造とボランティアコーディネーション」（筒井書房）日本ボランティアコーディネーター協会編
「グループワーク 理論とその導き方」（勁草書房）大利一雄著

【コメント】

講義名称	曜時
ボランティア論 <春> (P.145)	月 5

【教員名称】脇坂 博史

【講義概要】

阪神・淡路大震災から22年を数えます。1995年は「ボランティア元年」ともいわれています。その後、1998年には、NPO法（特定非営利活動促進法）も施行されました。ボランティア活動の内容も多様化しています。

さまざまなプログラムや考え方を通し、市民主体の活動とはどのようなものかを考えます。

【学習目標】

ボランティア活動は、ある時期に行うということや、ある活動が正しいというようなことではありません。生活に根ざした活動、さまざまな活動を通しての価値観を自身のものにしていくことの大切さや姿勢が共有できるよう、進めていきたいと考えます。

【講義計画】

- 第1回：授業と評価のガイダンス（必ず出席してください）
- 第2回：ボランティア活動支援室から
- 第3回：ボランティア活動の原則①
- 第4回：ボランティア活動の原則②
- 第5回：これまでの大災害とボランティア活動
- 第6回：ワークショップ①
- 第7回：ボランティア活動と障がい者理解
- 第8回：ワークショップ②
- 第9回：ボランティア活動と高齢者理解
- 第10回：ワークショップ③
- 第11回：ボランティア活動と家族関係
- 第12回：国際ボランティア活動
- 第13回：企業の社会貢献、社会的責任
- 第14回：活動発表①
- 第15回：活動発表②

【準備学習の指示】

ボランティア活動の内容や活動先の探索を心がけておきましょう。

自身の近隣のボランティアセンターを押さえておきましょう。

ボランティアに関する著書を調べておきましょう。

【テキスト】

【参考文献】

「福祉ボランティア」（朱鷺書房）

「ボランティア論」（みらい出版）

【コメント】

実際の活動やレポート、および出席を重視します。報告や発表への姿勢も重視します。ボランティア活動への真摯な取り組みの評価は厳しく行います。

講義名称	曜時
ミクロ経済学 03<秋集> (P.152)	月 1 / 木 2

【教員名称】矢根 真二

【講義概要】

テーマ： ミクロ経済学「この本だけをじっくり読めば必ず理解できる」と豪語する標準的教科書に挑戦

●事前知識は必要なく、重要な高2程度の数学は授業でもカバーしますから、ミクロ経済学の標準的なテキストを読み通し、体系的なモデル思考の習得を目指す意欲的な受講を期待します。最も重要なのは、数学スキルの有無ではなく、論理的なテキストを読み通す根気と習慣づけという地味な要素です。

【学習目標】

第1に、論理的なテキストの通読による読解力の向上と、市場とゲームの標準モデルの理解、第2に、問題練習による理解度の自己診断能力とモデル思考力の自覚、第3に、これらのスキルと知見を他の応用科目や実生活に活用できるようになることです。

【講義計画】

- 第1回：履修・学習の便益と費用
 - ミクロ経済学は、ほぼあらゆる人間・企業・産業に適用できるため、経営や法律・政治などにも非常に大きな学習便益を有する便利な道具です。しかし同時に、抽象的なテキストを読み数式にも慣れる自制心や忍耐力という費用もかさむため、経済学的な考え方のできる人も少ないのが現状です。そこで初回は、アナタの予算にあうか合理的な判断をして頂くための重要な履修情報を説明しますので、くれぐれも（行動経済学ないし経済基礎Aで言う）直感君ではなく、熟考様を呼び起こして判断しましょう。
- 第2回：ミクロ経済学の射程・威力・発展
- 第3回：経済学における微分の便利な役割
- 第4回：消費1：効用最大化モデル
- 第5回：消費2：スルツキー分解と需要曲線
- 第6回：ラグランジュ未定乗数法の活用
- 第7回：Review: 学習法と理解度の自己診断
- 第8回：生産1：利潤最大化モデル
- 第9回：生産2：複数の生産要素と長期モデル
- 第10回：市場1：部分均衡モデル
- 第11回：市場2：部分均衡モデルの使い方
- 第12回：市場3：一般均衡モデル
- 第13回：市場4：厚生経済学の基本定理
- 第14回：合理的主体と競争市場の均衡モデル【Exam-1】
- 第15回：総括1：競争市場の機能
- 第16回：市場の失敗・政府の失敗と戦略的思考
 - 後半は、ゲーム理論を中心に、外部性・公共財・独占・寡占・情報の諸問題と対策について学習します。
- 第17回：外部性の内部化
- 第18回：公共財の最適供給
- 第19回：独占モデル
- 第20回：価格差別
- 第21回：静学（同時）ゲーム1：純粋戦略とナッシュ均衡
- 第22回：静学（同時）ゲーム2：寡占モデル<1>
- 第23回：静学（同時）ゲーム3：混合戦略
- 第24回：動学（逐次）ゲーム1：サブゲーム完全均衡
- 第25回：動学（逐次）ゲーム2：コミットメントと寡占モデル<2>
- 第26回：動学（逐次）ゲーム3：長期的関係と協調
- 第27回：保険とモラルハザード
- 第28回：逆選択とシグナリング
- 第29回：不完全競争・情報と戦略的行動【Exam-2】
- 第30回：総括2：戦略と情報の活用

【準備学習の指示】

上記の指定テキストの事前読解と下記の教員サイトの授業スライドの問題練習が学習の基本です

●経済学部教員サイト：<http://rio.andrew.ac.jp/~yane/>

【テキスト】

神取道宏『ミクロ経済学の力』日本評論社

【参考文献】

上記指定テキストの通読がメインですが、実証に興味があれば、石田基広(2015)『新米探偵、データ分析に挑む』SBクリエイティブ、ゲーム理論の概観には、鈴木豊(2016)『完全理解 ゲーム理論・契約理論』勁草書房、が図書館にある読みやすいガイドです。

【コメント】

初回に説明しますが、2回の試験の合計得点の6割以上が合格の原則ですから、テキストの事前読解やスライドの問題練習といった自己管理能力を欠く方は注意して下さい。ただし、授業中の質問やQuiz等への積極的な参加を考慮する場合もあります。

講義名称	曜時
メディア文化特論－ドキュメンタリーを 作る・観る・読む <春集> (P.153)	月3/月4

【教員名称】鈴木 隆史

【講義概要】

ドキュメンタリーとは何か？テレビと映画ではドキュメンタリーといつてもどのように異なるのか？

ドキュメンタリーという他の映画と比べてどこか難しいもの、退屈なもの、面白くないもの認識されている。しかし、動物の生態や自然の素晴らしさや温暖化による地球環境の変化をテーマにしたもの、戦争や紛争の現場とその背景に迫ったもの、原発事故やその後に人々の暮らしを捉えたもの、介護、いじめなどをテーマにしたものなど様々だ。私たちの日常生活もどのような視点で切り取るかによって面白いドキュメンタリー映像を作ることができる。

本講義では、様々なドキュメンタリー番組や映画を鑑賞し、企画、撮影、編集など、どのようにしてドキュメンタリーは作られるのか？また、何をテーマにしているのか？何を伝えようとしているのかなどを共に読み解き、ドキュメンタリー映画の魅力に迫る。

ただし上映する映画や作品は変更することもある。

【学習目標】

上映される映像が何をテーマにしており、何をどのように伝えようとしているのか映像を読み解く力を身につける。

より問題を深く理解するために、映画の内容、背景に関する情報を資料や参考図書から得ることができるようにする。

じっくりと映像に集中して観る習慣を身につける。

【講義計画】

第1回：オリエンテーション：ドキュメンタリーとはなんだろうか？

あなたが考えるドキュメンタリーってどういうもの？今までに観たことのあるドキュメンタリー番組や映画を振り返る。
世界初のドキュメンタリー映画を鑑賞しよう
ロバート・フラハティ監督『極北のナヌーク』

第2回：ドキュメンタリーは嘘をつく1)

森達也著『ドキュメンタリーは嘘をつく』を読む
『極北のナヌーク』を分析する

第3回：ドキュメンタリーを楽しむ1)

まずは作品を観てみよう
関口祐加監督『毎日がアルツハイマー』

第4回：ドキュメンタリーの楽しむ2)

作品についてみんなで語ってみよう

第5回：ドキュメンタリーで時代を読み解く1)

大島渚監督『忘れられた皇軍』が描いた戦後
何が描かれていて、何を訴えているのかを考える、映像の背景、監督の意図を読み解く

第6回：ドキュメンタリーで時代を読み解く2)

映像'14「なぜ私は語り続けるのか～94歳ある日本兵の戦場～」

第7回：ドキュメンタリー作品の作り方・作られ方1)

作品のテーマを選ぶ、企画、取材、ロケハン、撮影、編集、試写、放映(上映)

NHK『素晴らしき地球の旅～海と森と人との約束』を鑑賞

第8回：ドキュメンタリー作品の作り方・作られ方2)

実際にどのように作品を作ったのか？番組を分解してみると

第9回：ドキュメンタリーで時代を読み解く3)

小川紳介監督『日本解放戦線 三里塚の夏』と亀井文夫監督『流血の記録 砂川』を観る

第10回：ドキュメンタリーで時代を読み解く4)

時代を映したドキュメンタリー。記録としてのドキュメンタリーを考える

第11回：ドキュメンタリーで時代を読み解く5)

記録映画作家土本典昭が描いた時代
土本典昭監督『水俣一患者さんとその世界』、『水俣一揆―一生を問う人々』

第12回：ドキュメンタリーで時代を読み解く6)

土本典昭『ドキュメント―路上』、『原発切抜帖』、『ある機関助士』ほか

第13回：ドキュメンタリーを楽しむ3)

マイケル・ムーア監督『ボウリング・フォー・コロンバイン』

第14回：ドキュメンタリーを楽しむ4)

マイケル・ムーア監督の作品とその特徴

第15回：ドキュメンタリーを楽しむ5)

ジャッキー・リム・サッローム監督『自由と壁とヒップホップ』

音楽とドキュメンタリーを同時に楽しむ

第16回：ドキュメンタリーを楽しむ6)

音楽ドキュメンタリーを楽しむ
マリク・ベンジェール監督『シュガーマン 奇跡に愛された男』

第17回：ドキュメンタリーは嘘をつく2) 捏造かやらせか演出か？

NHKスペシャル「ネバールの秘境 ムスタン王国に行く」のやらせ映像をめぐって

第18回：やらせを見破れるか？

『発掘！あるある大事典』の捏造はなぜ起きたのか？
番組制作の裏側を考える

第19回：ドキュメンタリーで時代を読み解く7)

NHKスペシャル『戦争とプロパガンダ～アメリカの映像戦略～』

第20回：ドキュメンタリーで時代を読み解く8)

レニ・リーフェンシュタール監督『オリンピア民族の祭典』、『意志の勝利』とヒットラー

ファシズムと優生思想

第21回：ドキュメンタリーで時代を読み解く9)

戦争と戦争責任を問う
『従軍慰安婦』についての映像と報道をめぐって

NHKETV特集『戦争をどう裁くか―問われる戦時性暴力』2001年1月30日放送

第22回：ドキュメンタリーで時代を読み解く10)

池谷薫監督『蟻の兵隊』

第23回：ドキュメンタリーで時代を読み解く11)

原発と事故
なぜ警告を続けるのか～京大原子炉実験所・"異端"の研究者たち (MBS 映像'08)

放射能汚染の時代を生きる～京大原子炉実験所・"異端"の研究者たち (MBS 映像'11)

第24回：ドキュメンタリーで時代を読み解く12)

松橋淳監督『ふたばから遠く離れて』

福島の事故が何をもたらしたのか
第25回：ドキュメンタリーで時代を読み解く13)

綱織あや監督『祝の島』

第26回：ドキュメンタリーで時代を読み解く14)

神の海に暮らす～まだ見えぬ原発に揺れる島 (テレ朝テレメンタリー 2016. 2016年11月6日放映)

第27回：ドキュメンタリーで時代を読み解く15)

沖縄基地問題を考える
三上智恵監督『標的の村』

第28回：ドキュメンタリーで時代を読み解く16)

編集でプロパガンダ映画を変える
ケヴィン・ラファティ、ジェーンローダーほか『アトミック・カフェ』を読み解く

第29回：ドキュメンタリーとは何か？

ジョシュア・オッペンハイマー監督『アクト・オブ・キリング』と『ルック・オブ・サイレンス』

第30回：ドキュメンタリーは面白い

まとめ

【準備学習の指示】

上映する映画の内容をよりよく理解するために事前に提供する資料や図書を読むことを求める。これは映像をより批判的に深く理解するためにも必要である。

さらに最終レポートを書く上で資料からの引用を求めるので必ず読む事。

授業に出席できず観れなかった映画は場合によっては You Tube などで見える事もできるので参考にする事

【テキスト】

【参考文献】

森達也著『ドキュメンタリーは嘘をつく』草思社、2005年、今野勉著『テレビの嘘を見破る』新潮社、2004年

鎌仲ひとみ、金聖雄、海南友子著『ドキュメンタリーの力』子どもの未来社、2005年、

佐藤真著『ドキュメンタリー映画の地平』凱風社、2009年、想田和弘著『なぜ僕はドキュメンタリーを撮るのか』講談社新書、2011年

【コメント】

本授業は映像作品を観るため、基本的には2時間続けて行うことが多い。遅刻は15分以上認めない。私語は注意をしてもやめない場合は強制退室をもとめる。その時は出席としてカウントしないのでそのつもりで。

映画を上映が始まった後の入室も不可。

毎回授業についてのレポートを提出すること。これが出席点としてカウントする。代筆は発見次第評価はしないの。

最終評価は最後に課題として出すレポートの提出による。また、授業期間中で上映中のドキュメンタリー映画を映画館で一本以上見るとを勧める。レポートへの記述のため。